

英国の野生動物医学修士課程における爬虫類医療に関する教育内容

浅川満彦

酪農学園大学 獣医学群

はじめに

爬虫類が、哺乳類・鳥類とともに、動物愛護法の対象となった今日であっても、この動物群が日本の獣医学では、卒後教育含め、ほとんど対象とはされてはいない。一方、爬虫類医学・医療に関する卒後教育は、国外では、いくつか知られる。たとえば、ロンドン動物学会 (Zoological Society of London; 以下、ZSL) とロンドン大学王立獣医大 (Royal Veterinary College; 以下、RVC; 現在はロンドン大学の一つのカレッジ) とが共同で開講した野生動物医学修士課程 (MSc Wild Animal Health; 以下、WAH) の1年間のコースの中には関連の座学と実習が含まれている。エキゾチックペット研究会が、2018年、学会として再スタートした背景には、体系的な卒後教育を担うという宣言でもあろう。そこで、少々旧聞にはなるが、著者が参加したWAHでの様子を紹介し、参考例としてご覧頂ければ幸いである。

コース運営機関など

近代動物園の祖とされるロンドン動物園 London Zoo は、ZSL の研究活動のための一施設として設立・運営されてきた。しかし、これを市民への娯楽・啓発教育を理念に、1847年に一般公開され、ロンドン市民に愛されるうちに、正式名称 Zoological Garden が短縮化され Zoo と呼称されるようになった。日本を含め世界中でロンドン動物園のような施設を参考に同じような施設が設立されるうちに、この愛称が一般名詞化 (zoo) したものの、本来の研究施設という面が完全に見落とされ今日に至っている。

そして、このような zoo の総本山とも云うべきロンドン動物園では、教育・啓発の理念が今日まで受け継がれ、WAH のような専門教育の拠点として結実している。しかし、ZSL は学位授与機関ではないので、

ロンドン動物園に地理的に近接した RVC と連携して、WAH 課程を共同開講している。したがって、修士号証書の授与機関名は RVC と記されている。なお、カウンターパートである RVC の概要やコースの入学要件・教育体系などは Sainsbury ら (2001) を、また、コース修了後の進路は浅川 (2008)、古瀬・浅川 (2014) および田中・浅川 (2014) を参照されたい^[1,2,3,4]。

爬虫類に関する教育内容

著者は WAH 課程の第6期 (2000年から2001年) として在籍した。この課程では先に述べた様々な動物の医療を体系的に学ぶ仕組みになっており、たとえば、鳥類に関しては浅川 (2018) の科目一覧表にあるように形態・生理・疾病・臨床・保全など基礎・病態・臨床・応用の流れで用意されていた。爬虫類に関しては表1の内容が用意されていた^[5]。もっとも、著者が修了し、約20年が経過し、2003年からは野生動物学修士課程 (MSc Wild Animal Biology; 以下、WAB) も併設されたので、Royal Veterinary College and Zoological Society of London (2017) などで公開されていた情報を、表中 [] に追記をした^[6]。

シラバスを概観するに、目立ったところではウイルス性疾患の充実 (後述の「感染症重視」とも関連する) といくつかの講義担当の変更が認められたが、大枠は不変であった。講義科目では、これは他の動物群でも同様であったが (Sainsbury ら, 2001)、感染症 (寄生虫病) の内容が爬虫類でも充実していた点は注目された^[1]。これは、エキゾチック動物医療を含む野生動物医学の神髄・目的の1つが、宿主-寄生体の曼陀羅と如何に適切に対峙をするのかを思考させることであり、シラバスはこの哲学を具現化したものなのであろう。著者は勤務先で寄生虫 (病) 学を教えているが、このコースに参加した当時、

表1. ロンドン動物学会とロンドン大学王立獣医大共同開講の野生動物医学専門職修士課程における爬虫類医学および医療に関する内容とその担当者

A	機能形態学
1	Waters, M. 臨床において密接に関連する爬虫類解剖学・生理学的多様性
B	血液学
1	Hart, M. G. 爬虫類の血液学の手技
C	病理学
1	Cooper, J. E. 爬虫類剖検法の講義と実習
D	飼育・飼養・栄養学
1	Hall, H. [Tapley, B.] 爬虫類の飼育管理
2	Wenman, E. 爬虫類の飼育管理実習
3	Frye, F. L. 爬虫類の栄養
E	保定と臨床検査等
1	Lawton, M. [Rendle, M.] 爬虫類の物理的保定、検査および薬物投与方法
2	Lawton, M. [Divers, S.] 爬虫類の化学的保定（麻酔）およびモニタリング
[3]	Divers, S. 爬虫類の肝臓・腎臓疾患
F	生殖器疾患学
1	Divers, S. 爬虫類の生殖器疾患
[2]	Lewis, W. イグアナのハンドリングと生殖器手術法
G	画像診断学
1	Du Boulay, G. 爬虫類の画像診断
2	Sainsbury, T. [Divers, S.] 爬虫類のX線読影実習
[3]	Divers, S. 爬虫類の内視鏡法
H	眼科学
1	Williams, D. L. 爬虫類の眼疾患
2	Lawton, M. 爬虫類の眼科検査の講義と実習
I	予防と治療
1	Lawton, M. 爬虫類への薬物の投与
2	Lawton, M. 一般的な爬虫類の疾病治療
3	Frye, F. L. 爬虫類の一般的な臨床技術
[4]	Hatt, J.-M. 爬虫類の消化器疾患
J	代謝性疾患学
1	Frye, F. L. 爬虫類の栄養性疾患
2	Cooper, J. E. [Hatt, J.-M.] 爬虫類の脱皮不全およびその他の外皮疾患
3	Zwart, P. 飼育管理失宜による疾病
[4]	Hatt, J.-M. 爬虫類の食餌改善による治療
K	細菌性疾患の疫学、診断、治療および予防など
1	Zwart, P. 爬虫類の細菌性疾患
L	ウイルス性および真菌性疾患の疫学、診断、治療および予防など
1	Zwart, P. 爬虫類のウイルス性および真菌性疾患
[2]	Marschang, R. 爬虫類のパラミクソウイルス感染症
[3]	Marschang, R. 爬虫類のヘルペスウイルス感染症
[4]	Marschang, R. 爬虫類のイリドウイルス感染症
M	寄生虫病の疫学、診断、治療および予防など
1	Zwart, P. 爬虫類の寄生虫病
2	Peirce, M. A. 爬虫類などの血液原虫
[3]	Divers, S. 爬虫類の治療学
[4]	Divers, S. 爬虫類の肝臓・腎臓疾患
N	通常診療に随行しての動物園展示爬虫類の臨床実習（クリニカル・ローテーション）
1	ロンドン動物園
2	ウィップスネード野生動物公園
O	外科学
1	Divers, S. イグアナの軟部組織手術の実習
P	野外調査
[1]	Stephen, I. 両生類と爬虫類の野外調査法
Q	その他
1	Waters, M. 両生類の生物学
2.	Divers, S. 両生類のハンドリング

爬虫類の寄生虫についての知識は、一部の線虫類を除けばほぼ皆無で、授業を受けながら、自己嫌悪に陥ったことを今でも生々しく思い出す。

授業の様子

ロンドン動物園の施設は19世紀から使用されているものが多く、中でもReptile Houseは有名で、第1作の映画『ハリーポッター』でも登場したので、ご記憶の方も多かろう（因みに、著者がコース在学中にこの映画の撮影が行われた）。写真1は参加者がこの施設のバックヤードを視察している様子である。

臨床実習(表1のO)ではロンドン市内でエキゾチック動物病院を開業している獣医師が、ペット用のグリーンイグアナを用い、実際に手術を行うものであった。幸か不幸か、その術者として著者が任ぜられてしまい(図2および3)、往生をしたが得難い経験をした。

授業は講義とデモを併せた形式で、たとえば、画像診断(表1のG)と皮膚病(表1のJ)の様子を図4で示した。現在、国内のコアカリ体制の獣医大で導入されているクリニカル・ローテーションに相当するような臨床実習(表1のN)が、当時のコースで組み込まれていた。専任獣医師に随行してロンドン動物園およびそのサファリパーク版であるウィップスネード野生動物公園内で実際の診療をサポートする形で行われたが、著者も夢中であったため、写真があまり残っていないのが悔やまれる。

おわりに

このコースは1年間で、参加費も約300万円と高額であったが、勤務先で研究・教育をする上で、得る

ところは大きかった。本来ならば、帰国時点で紹介すべきものであったが、この約20年間、著者の周辺は極めて忙しい状況で、これをなごりにしていた。しかし、本学会が研究会からステップ・アップしたことを機に、また、著者が勤務先で接する学生の多くが、最近、爬虫類を含むエキゾチック動物診療を目指すものが急増した背景から、このような小文を残すことを決心させた。本拙文が日本におけるこの分野の卒後教育充実の一端緒となれば幸いである。

引用文献

- 1) Sainsbury A, Fox MT, 大平久子, 河津理子, 浅川満彦 (2001) 英国王立獣医学校およびロンドン動物園による野生動物医学コースの概要と参加者の印象について. 獣医畜産新報, 54: 801-812.
- 2) 浅川満彦 (2008) 国内外における保全医学およびこれに関連する分野の専門職大学院最新情報. 野生動物医学会ニュースレター, 26: 10-13.
- 3) 古瀬歩美, 浅川満彦 (2014) 英国野生動物医学および生物学専門職大学院修了者向けニュースレター上に見られる関連分野の最新職域動向. 畜産の研究, 68: 526-534.
- 4) 田中祥菜, 浅川満彦 (2014) 英国MSc WAHおよびWAB修了者向けニュースレターに見る野生動物医学進路動向(博士課程、ポスドク、生涯教育など). 日本野生動物医学会ニュースレター, 38: 14-18.
- 5) 浅川満彦 (2018) 鳥類医慮の今-なぜ、鳥類を診るセンスがないのか? 愛鳥家のための勉強会講演録、とりきち横丁札幌店、札幌: pp. 11.
- 6) Royal Veterinary College and Zoological Society of London, (2017) MSc Wild Animal Biology/Health Course Content 2017/18, <https://www.zsl.org/sites/default/files/media/2017-08/MSc%20Wild%20Animal%20Biology%20and%20Wild%20Animal%20Health%20Course%20Content%202017-2018.pdf> (閲覧日 2019年7月2日)



写真1. ロンドン動物園Reptile Houseのバックヤード視察の様子

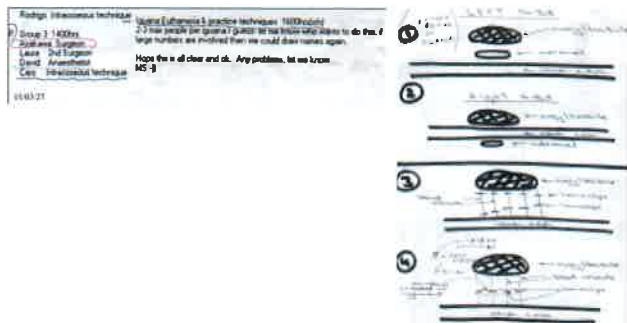


図2. グリーンイグアナ手術実習術者任命のメール(左)と講師お手製の開腹術参考用ハンドアウト



図3. グリーンイグアナ手術実習前、麻酔施術の様子



図4. デモ形式授業で画像診断(左)と皮膚病(右)の様子